

研究タイトル：文学作品中に存在する聖俗循環，同調圧力，象徴としての貨幣研究，及び入れ子構造の物語における情報の流れの方向性



氏名：	窪田 眞治/KUBOTA Shinji	E-mail：	kbt@sendai-nct.ac.jp
職名：	教授	学位：	修士(文学)
所属学会・協会：	日本独文学会		
研究分野：	ドイツ文学		
キーワード：	ドイツ語, ドイツ文学, 聖俗循環, 同調圧力, 物語理論		
技術相談 提供可能技術：			

研究内容： 聖俗理論，終末思想，物語理論

1) 阿部謹也は、日本に存在するのは欧米とは異なり「社会」ではなく、成文化されない掟に規定された「世間」であり、近代以降の欧米社会にはこの「世間」に相当するものはない、と述べました。しかし、19世紀ドイツ文学の作品中には「世間」と呼んで良いような社会関係、同調圧力が描写されている例があります。

これまで社会関係一般を媒介・規定するもののうち貨幣、言語、同調圧、聖俗循環を伴う社会関係などに着目し、人が自明のものとし、意識せずに前提、共有している思考形態、傾向、信念などについて考察してきました。

共有される信念等は、伝統社会においては広義の宗教儀礼の形で、社会で共有される体験として定期的にケケガレ→ハレ→ケケガレ→ハレ・・・と循環します。祝祭においては例えばケガレである「冬」が擬人化、抹殺され、「春」の訪れが表現されるような物語が演劇的に演じられる例があり、これらは文学と密接な関わりがあります。

この循環が特定の時点でストップし、永遠のパラダイスに至る、とする思想が終末思想です。終末思想に属するものには文字通りの宗教的終末思想の他にユートピア思想、ある種の革命思想、世直し運動、そして別途特筆すべきカルト宗教などがあります。ハレは日常世界とは逆さまの世界です。何が逆さまになるかはおそらくその都度恣意的に選択されますが、選ばれやすいのは身分階級の反転、男女の反転、大音声、鯨飲馬食、蕩尽、固有財産の止揚などがありますが、中でも貨幣の廃止、暴力の奨励、生命や人権の軽視などは本当にハレで循環を止めようとして先鋭化すると社会に大きな危険をもたらします。

これら聖俗は人間の世界観に関わることなので、個々の社会現象を超え、多くの人に関わる問題です。

2) 現在は物語の枠構造に着目し、枠を形成する境界線を越えて流れる情報の方向性について勉強しています。虚構の物語の登場者は虚構の存在なので、生身の私たちの世界で自律行動する存在ではあり得ません。しかし文学作品中には、枠物語の中の虚構の存在が、枠の外の情報にアクセスできるような描かれ方をすることがあり、どのような仕掛けがあればそれが可能なのかを考察しています。一般化すれば、私たちは如何にして外部について、例えば私たちの宇宙の起源、宇宙の外部について知り得るのか、というような問題とも関わることで、それは単に信念や幻視なのか、それとも科学の手順を経た真理と呼べるものなのか、というような問題と多少なりとも関わりを持ちます。

文学研究は実利のない虚学なので、シーズ・ニーズといった概念にはなじまないものです。ただ市場原理至上主義が行き詰まり、それに代わる有効な思考モデルが未だ見つけられないようであるなかで、思考モデルを広義の「物語」という言葉に置き換える事が可能な場合があるなら、狭義の物語論もまた考察の補助程度にはなるかもしれません。

提供可能な設備・機器：

名称・型番(メーカー)	

文学  
各国の文学